

川
多
く
は
な
す

大原富枝

サン・ブエリイペ号は来た

きりぎりすの十月一日

のびる

ふたつ

三つ

むす



サン・フェリーペ号は来たき

昭和四十六年十月五日 印刷
昭和四十六年十月十日 発行

定価五五〇円

著者 おおはら ともえ 大原 富枝

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)二六〇一・二二一
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社またはお買
求めの書店にてお取替えいたします)

サン・フェリーペ号は来た

老いた漁師は網を漉いていた。浜辺の大きな石に網の太綱を結びつけ、大石からは網の長さだけ遠く離れて一枚の筵を敷き、その上に大あぐらをかいて網を漉いている。

老人はずっと昔に伐られたままになっている老松の大株のように岩乗な姿で坐っていた。周りの砂や小石に秋の陽がしみ入るように明るく照り、砂粒や小石の一つ一つが、傾いた陽にそれぞれ自身の小さい影をもっていた。

漁師の眼は、あまりに長い間、太陽と波と潮風に晒されていたために、いまではもう腐りかけた魚の眼のように輪廓が溶けかかり、とろけたように青っぽく白い眼になっている。もうレンズの役目をしなくなっていて物の象をそこに映しはしない。

しかし彼は自分の周りにしみに照る秋の陽の光はちゃんと見ていた。いや、それ以外にたくさんのものを確かに見ていた。

老いた漁師の漉いているのは、破れた網であつた。もう何年か前から老人は破れ網のつくろいを毎日やっている。古い樹の枝のようなごわごわした左手の大きな指は、長年の勘で生きもののように網目をかい潜つて、小さな破れ目をも確実に探りだす。右手には麻の太糸を通した小さい竹の道具を掌のなかにすっぽり匿すように握つていて、その麻糸が破れ目を補修してゆく。

「爺さん、網たのんだぞ」

村の漁師たちだけでなく、遠い村からも漁師たちは破れ網をかついで頼みにくる。そのたびに老人はとろけた白っぽい眼をあげ、おう、と答える。

眼の见えないことに彼は何の不自由も感じない。毎日たくさんものを見ている。あまりにたくさんものを見てきたので、眼はもう見ることに倦きてしまったのだ、だから自然にものを映すことを止めてしまったのだ、と彼は考えていた。

老人の眼はいい眼であつた。魚見台の上に坐れば、魚群の来襲を見逃すことは絶対にない。この湾内の水は静かであつた。魚群はその水面の光に微妙なさざ波のような翳を生じながら移動する。それはやさしく美しい光の縞であつた。絵師のように、漁師である彼の眼もその魚紋の美しさを見分けた。

春夏秋冬、この湾内はいつも静かで眺めがよかった。

「ええところぞい、ここは……」

いまでも老人はひとりつぶやく。

老いた漁師は網を漉きつつ居眠りすることがある。手は休まずに破れ目を拾って動いているが、老人はとろとろと居眠っている。

「おう、ロドリゲス……」

眠ったまま網を漉きつつ、老人はつぶやいた。つぶやきというよりも低い叫びが老人の口から洩れた。

「お爺、なにいうた？」

少し離れたところに干してある小豆の筵を畳みにきた婆さんが聞き咎めた。

老人は自分の声で眼を覚ましていた。何か叫んだと思う。何と叫んだのかは憶えていない。しかし、いま叫んだ舌の根だけは、たったいまの自分の動きを憶えているようである。その舌根っこのおぼろげな記憶を壊さないように、舌べろよ、いまいうたこと、もいつべんいうてみた、と爺さんは自分の舌にいたわり深く頼んでみた。「いうてみた」というのは「いうてみいよ」という意味である。

「おう、ロドリゲス！」

舌根っこはやっとそういった。あと一秒も経てばもう憶えてはいられなかった、というようなおぼっかなさで。

爺さんは舌根っこの動きにびっくりして、見えない眼を睜り、

「おもよ、うら、いまなんというたや？」

と自分の言葉を確かめた。

筵の上に膝をついて、団扇のように拡げた指で小豆を混ぜ返していた手をとめたまま、婆さんは答えなかった。彼女も驚いて眼を瞠り、爺さんを見つめているだけだった。

「おもよ、うら、いまなんというたや」

老人はもう一度首も動かさず同じことを妹に訊いた。

「ロドリゲス……」

婆さんは心許ない発音でつぶやいた。低い小さい声だったので、今度も老人の耳にはなにも聞えなかった。

「おもよ、うら、いまなんというたや？」

爺さんはもう一度くり返していった。

「おもよ、お前そこらにおけるじやろが……」

老人は少し首を動かしていった。

「うら、いま、ロドリゲス、いうたかや」

「うん、兄^{あに}さ、いま、ロドリゲス、いうた」

婆さんは初めて答えた。

「そうか、やっぱ、ロドリゲス、いうたかや」

腐りかけた魚の眼のような、爺さんのとろけた眼から涙が一粒ころがり落ちた。

「そうか、やっぱ、うら、ロドリゲスいうたかや……」

婆さんは身動きもせず老人の方を見ていた。老人は首にかけている手拭で眼をぬぐった。

「おもよ、ロドリゲス、死んだぞいのう」

「ああ、もう生きちゃいまいのう」

「うんにや、ロドリゲス、いま、死んだぞい、そういうておる。うら、見たぞい」

老いた漁師はそのときになって居眠りのなかで見た夢をおぼろに思いだした。人が集ま
つて、一人の寝ている人を取り囲んでいた。寝ている人は瘡せこけて顎ひげが伸びていた。
「涙の牢でみた、ゼズみたいじゃったぞい……」

爺さんはそうつぶやいた。たしかそういう夢を見たと思う。一人の顎ひげの伸びた瘡せ
こけた男が寝ていて、たくさん男や女がそれを取り囲んでいた夢を。しかし、確かに見
たのか、といわれるとおぼつかなくなる。爺さんの眼はいまは見えないが、あまりにもた
くさんのものを見てきたので、さまざまの映像が頭脳あたふのなかには残っている。爺さんの見
えない眼はいまもたくさんものを見るのである。

「おもよ、おぬし、いま兄あにさというたな、うらのことを……」

爺さんはふつと頭を振っていった。

「わし、兄あにさいうたかのう？ わし、おぼえちよらんが……」

おもよは小さい羞んだような声になっていた。もう長い間、兄を爺さんと呼び馴れている。いまさつき、兄さといったのだろうか……

兄さとおもよは口のなかでいつてみた。昔は兄さ、兄さ、と一日に何十べん呼んだことやら。母が弟を生んだ産褥の床で死んでから、おもよは兄の腰巾着であつた。

「ロドリゲスも死んだらうぞい、のう、兄さ……」

砂粒や小石の一つ一つの影がそれぞれにまた伸び、夕風が吹きはじめていた。爺さんもおもよも、手を休めて自分自身に話しかけている。

——ロドリゲス、あれはもう昔々のことぞいのう、憶えていやるか、お互いに若うて、せつなかつたことぞいのう……

そうだったのだろうか。

あのロドリゲスが年老いて故里に死のうとしていたのであろうか。

死の近づく床で、ロドリゲスはふと日本の小さい島の、おだやかな湾の水を思い浮べたのであろうか。バターン半島のコチノス岬に近い漁村に、年老いた水夫は船から下ろされ、その海辺に幾年かを生き、いま死を待ちつつ、もう大方の時間静かに閉じているその瞳の裏に、黒潮の波濤の彼方に霞みながら小さく連なる日本列島を眺め、そのなかの小さい島に住む老いたであらう友達漁師とその妹を、白昼夢のなかに訪れて別れをいいたかつたのであろうか……

夕陽は波に沈み、茜色の残光が浜を染めてくる。しかし老人は網を漉きつづけていた。陽の沈んだことは盲目の老いた漁師にもわかる。彼はしかし仕事をやめようとはしなかった。おもよも筵の上に膝をついたまま、小豆の粒を掬っては指のあいだからこぼし、掬ってはこぼししていた。

おもよの眼もいま、兄と同じく外界のものは映さなくなっているのであった。老いた兄妹は、黙って同じものを眺めていた。

遠い遠い海の果てのその故里に、もしロドリゲスがいま死につつあるのだとしたら、彼のあの淡い空色をした眼の見えるものも、多分、この日本の四国の海辺の老いた兄妹がいま見ているそれと同じものであったろう。

鰯雲が空の半ばを覆うて高くはろばろと拡がっていた。さざめくように賑やかな空でいて、またしんとした静けさである。船はその空を割るように、異様な姿を大きく湾口に現わした。

幾抱えもあるほどの大櫓おほはしらが途中から折れていることが、船を瀕死の巨人のように恐ろしく、痛々しいものに見せていた。

この浦の漁師たちはひとしきり騒いで呼びかわしたあと、いっせいに沈黙して、恐れ憚るように異国船を見守った。

大櫓も、後尾の櫓も折れた南蛮船は、水すましののように敏捷に漕ぎ廻る日本の漁船たちが、避けてつくった一本の水路をしずしずと進んでゆく。

「南蛮船が遭難しておる。姿を見たものは一番に浦役人に知らせよ」

一昨日の朝早く、そういうおふれがこの浦の漁師たちに下されていた。

「南蛮船に近寄ってはならぬ。船に近寄り、船の南蛮人やその積荷に触れたものは罰する。殊に積荷の漂流したものを私したものは斬る」

その恐ろしい南蛮船がとうとう現われたのである。

「お父う、南蛮の船は大けなもんじゃのう」

寅三は、反対の舷で櫓を漕いでいる父親に話しかけたが、父親は返事もしないで異様な船を見つめていた。

「いやなものが、くるぞい」

間をおいてぼそっと、父親はいった。鰯雲のはろばろと棚引く高い空の下に、傷ついた黒い船は、巨きな海鳥の瀕死の姿のように、確かに不吉なものに見えた。

「お父う、なぜいやなものぞい？」

若い寅三には珍事はすべて喜びと昂奮を伴っていて、心が弾むのである。

「また、なんぞ、いやなことが起ろうぞい」

父親は不機嫌にぼそぼそとつぶやいて、禍々しそうに南蛮船を眺めた。

「お父うよう、あの船にや、宝物山ほど積んじょうぞいのう」

すると寅三の頬すれすれに親父の唾がとんだ。親父が一番激しく怒ったとき、そして手がふさがっているときに、平手打ちの代りに飛んでくるものであった。

「^{どうなか}胴中ばっさりやられたいのか」

寅三は首を竦め、つぶやいた。

「うてみるだけぞい」

「おんなじ事ぞい。阿呆が！」

親父は苦りきっていた。五十年にまだ少しは足りないがない漁師暮しが、彼をこのよ
うな用心深い男に仕立てあげていた。

「早う漕げ、うちへ去^いんで黙って寝ておりゃア、禍いも寄りつかんぞい」

寅三の櫓を漕ぐ腕がうわの空になっているのを、親父は苦い顔で見え怒鳴った。とても
この夜を自分の小屋になど寝ていられるものか、と寅三は思っている。どうやって家を抜
けだしたものか、とさっきから考えめぐらしている。

——あの鰯雲の空は、わしが生涯で眺めたどの空よりもはるばると高く、何よりもし
んと静かだった。

十字架雲の現われたあの日の空のように、何か運命的な静寂に包まれていたものだ。あ
れが初めて見る「日本の空」だった。日本の浦戸の空だったのだ。

それにしてもあれは何という酷い航海であったことか。生涯を海で暮したわしだが、あ

れ以上の暴風雨つづきの航海というものは、あれを最後にもうなかった。

死が近づいてくる船乗りの頭のなかには、海と空だけだ。なんとたくさんの海の波と、空の雲が、わしの頭のなかに詰っていることか、あとのことは皆もう消えちまった。いっさいの運命が海と空にあったのだ。

あのポンプ押し作業の苦しかったことは、あとあとまで夢にまで見た。無理もない。何度となく、死ぬ方がまだ楽だと思ったくらいだから。あの苦しい排水作業を免れるものは船中では誰一人なかった。老人やパードレたちも、体力のないものはないなりに、弱い者は弱い者なりに、全員が必死でポンプを押した。これを怠れば船は沈没し、死があるだけだった。もう二十日も、サン・フェリーペ号の乗組員たちは代る替るポンプの柄にとりついて、ポンプと格闘をつづけてきた。

次の組に交替すると、甲板の上に這いつくばって暫くは動けもしない。ふいごのように烈しく波打つ胸は、いまにも心臓が破れてしまうのではないか、このまま死んでしまうのではないか、と思われた。交替の度、いつもそう思った。

ここに一滴、咽喉をうるおす水があったらと思う。周りを無限の海水に囲まれながら、飲むことのできる水はなかった。自分の舌の根に唾液の湧いてくるのを待つほかはない。舌の根がやっと湿ってくると、甲板にへばりついた身体をひっぺがすように起して、後ろ手を突き、仰向いて空を眺めたものだ。空を見ることがまるで唯一の助かる手段だとも

いうように……

空にはもう秋がきていた。鰯雲が空の青を透してレース編みのように棚引き流れ、思わず眉を開くように爽やかな暢びやかさである。ああ、これが日本の空だ、日本の秋の空なんだ、とわしは自分にいって聞かせた。

ロドリゲスよ、お前の憶れてきた日本の空だぜ、よく眺めて憶えておけよ。

船乗りになって五年目だった。帆柱を折るほどの暴風雨にも遭ったことがあるし、朋輩を波に奪われたこともある。しかし、ほんとうの試煉というほどのものにはまだめぐりあってはいなかったのだ、そのことが今度という今度よくわかった。

あの航海には初めっからつまずきがあったんだ。海の男たちはいまも昔も縁起をかつぐ。そこに運命を推しはかるより他に方法がないからだ。しかし、あのとき、サン・フェリーペ号の男たちが不安がったのは、あながちに縁起かつぎだけではなかった。具体的に不安になる問題が幾つもあった。そうだ、幾つもあったのだ。……

フランシスコ・ロドリゲスは、もはや再び自分の足で立つことは望めまい、と観念しているベッドの上で終日とろとろと眠ったり醒めたりしながら、日本のことを思いだしていた。七十数年を生きてきたことは夢のまた夢のように定かではなかった。しかし、日本と